FAO 林業職員体験記（2）

笠　井　秀　則

ペンシオーネでの生活は時間的に何かと制約されるため，早く貸家を見つけようとした。プロジェクトの同僚達に聞いて安全で便利の良い地区を重点に，毎日，街角のキオスコで新聞を買い広告欄で適当な物件を捜した。何件かの物件を当った後，どうやら一人住まいに適したデパルタメント(アパート)を見つけた。リマの南のミラ・フローレス地区の一角に在る12階建ての10階の一戸で，家具付3居室，電話，車庫付，門番居住で買物や通勤にまあ便利な場所だった。契約書の用語，内容についてはプロジェクトのコルディナドールであるモレー氏の奥さんが弁護士だったので好都合だった。ちなみにモレー氏はフランス系のペルー人で現フジモリ大統領も学長を務めたことのある国立農科大学の林学部長を務めたこともあるうえに，ペルー林学会の初代会長を務め，ペルーの森林植生分布図を作製した人物で，林野庁長官は彼の教え子の一人である。当月の家賃と敷金2か月分を支払い，ペルー到着の10日目にしてペンシオーネから引き移った。FAO 勤務の外国人で US ドルでの家賃支払いが確実ということで，大家は喜んで貸してくれた。そして，ペルーにいては自分の資質に見合う職につけないため，当分アルヘンティーナ（アルゼンチン）で暮らすから，その間居て良いと言い残して去っていった。

住居が決まったので次は車捜しにかかった。免税で1台買える権利を持っていたので販売店に当ったところ，在庫不足で新車は早くても半年後の納車になるとの話だった。そんなに待てぬので中古車を捜すことにした。修理時の部品確保の容易さ，リマの年間降水量は 5 mm 程度しか無く埃っぽいのと，街中の走行時の安全のため窓を閉めておけるエアコンつき等を考慮して，現地組立てのニッサンサニーを買った。所有証明書の書き替えに数か月を要するために当座は前所有者の証明書で運転した。免許証は国際運転免許証が通用した。この2つの証書を携行してないと検問時に盗難車と見做され警察にひっぱられる羽目になる。

車に関してのトラブルはいろいろあった。買って3日目に市内に数軒ある日本風レストランテに昼食に出掛けた。食事を終えて，入口の前に駐車しておいた車に乗り込んだところ，少し後ろに倒して運転していた座席の背もたれが定位置に起きている。これはやられたかなと思い，降りてトランクルームを開けてみた。案の定，ジャッキとスパナが盗まれていた。スペアタイヤは特殊錠で固定してあったので大丈夫であっ

KASAI, Hidenori : A Life as an FAO Forestry Expert (2)
林野庁林産課

た。当時タイヤは超品不足でなかなか手に入らず，あったとしても途方もない値段であったので磨り減ったタイヤで走っている車が大多数であった。さて盗まれた品は工具店で新品を買った。市内の通りの交差点の角等で出所の知れぬ品を立ち売りしているが，買う気にはならなかった。この災難に遭ったため，即，車に警報器をつけた。回路を切らずにドア等を開けようとすると警報が鳴り出す代物で，ペルーでは人気商品の一つであった。修理工場のメカニコに言わせれば，気休めで，その道のプロにかかれば役に立たない。なるべく駐車場に入れるか，車の見える所から離れぬこと，車の中に貴重品を残さないこと，とにかく普段の気配り注意が肝腎との言だった。そのため4つのタイヤを盗難防止用の特殊ナットで取り付けている車が多く見られた。ちなみに日本仕様と違い，ドア，トランクルーム，ガソリンタンク，警報器，みんな別の鍵で開ける。車だけで4種類の鍵が要る。外国では鍵に取り囲まれた生活を強いられるが，私の場合は車の鍵の他に，自宅の玄関扉用2，勝手口1，デパルタメントのロビー正門1，駐車場入口扉1，駐車場とロビーとの通用口1，プロジェクト事務所の扉2枚用4，机の引出し2，これだけの鍵を束にして腰に下げて出歩いていたのであった。

写真-1　プロジェクトの仲間達（右から2人目がモレー氏）

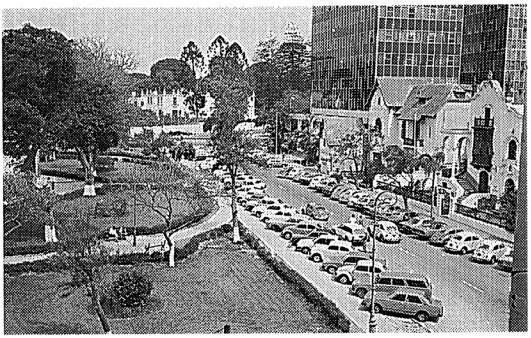


写真-2　事務所からのリマ市内

他によく盗まれる部品はヘッドライトで，知人の何名かは被害にあっていた。そこで私も修理工場でライトが外部から取り外せぬように改造してもらった。日常の整備が良くないのと運転が乱暴なため，事故が多く，新車と部品の供給不足と経済力不足のため修理で対応するしかない。手っ取り早い部品調達方法として盗品が横行する訳である。

8月になって3週間森林地帯を訪れる機会を得た。アマゾン地域の熱帯林の経営に

ついてのセミナールで，ペルー国内の林業・林産業プロジェクトの現場をいくつか見学するものである。ラテンアメリカではジャングルのことをセルバというが，ペルーの太平洋に面した海岸地帯（コスタ）のリマからアンデス山脈を越えて初めてアマゾン地域に入るのである。セミナールの一行はアマゾン流域諸国のボリビア，ブラジル，コロンビア，エクアドル，ペルー，スリナム，ベネズエラの政府林業関係者と外国援助協力機関関係者から成る30名余だった。最初の目的地の高地セルバ地域のサン・ラモンまでペルー空軍のチャーター機で空の旅。出発の朝7時半にホルヘ・チャベス空港へ着き，待つこと2時間．チェックインする気配がない。南米時間のことではあるが，訳を聞いてみると，現地の天候が悪く有視界飛行では着陸できないため待機して天候の回復を待つしかないとのこと。そのまま昼まで待ったが，回復見込みなしで結局，翌日出直す羽目になった。空軍は内職に空軍の輸送機をチャーター機として民間人に有料で利用させていた。後日，リマのプロ・フトボル(サッカー)チームを乗せたチャーター機が墜落して人気選手が多数死亡したため，空軍機の民間人利用は禁止された。さて，翌日，遅れはしたものの我々は双発プロペラの落下傘降下兵輸送機で離陸した。機の小さな窓を通して眺める標高6,000 m 級の頂上に雪を戴くアンデス山脈はまさに雄大であった。

2時間ほどでサン・ラモンに着いた。ここから4輪駆動車に乗り換えて未舗装の穴だらけの道を4時間半あまり揺られてオクサパンパの町に着いた。かつては天然広葉樹林の製材で栄えた所だが，周辺の経済林を伐り尽くした今は活気がない。数年前から伐採跡地のマツ類や広葉樹の植林が試験的に行われていた。苗畑と植林試験地を見て次の日サン・ラモンへ戻った。

次の目的地のイスコサシンまでは2機の小型機に分乗して行くのだが，河岸台地の土の滑走路脇で朝から待てどもチャーター機は来ない。谷あいの雲がかかり易い気象で有視界飛行の小型機は飛べないのだ。昼過ぎにやっと到着し，積んできたドラム缶を下ろし，その缶からの燃料補給を皆で手伝い離陸準備を整えた。搭乗前に白人のパイロットが各人の体重を聞く。年代物の飛行機ゆえ積載重量のチェックは必須事項で，ペルーの正規国内定期便でさえも必ず体重と携行荷物のチェックをされる。私はカナダ製のデハビランド機，上翼式空冷星形10気筒単発20人乗りに乗った。他は4人乗りセスナ機である。滑走路を300〜400 m 走って舞い上がった。所々切れ目があるものの厚い雲がかかる谷間は気流が不安定で機は揺れ続ける。気密の悪い機の扉の隙間から風が吹き込むため機内は少し寒い。似たような経験として，かつてネパールの山岳地をフォッカー26型機と27型機で飛んだ時のことを思い出した。機は次第に高度を上げ雲の上に出てコンパスを頼りに小1時間飛んで目的地の上空辺りに着いたが，一面の雲海で地面は見えない。雲の切れ間を捜して上空を旋回する事30分余り。しかし状況は好転する見込みが無く，燃料のこともありパイロットは引き返す決断を下した。有視界飛行の悲しいところだが，闇雲に雲海に突っ込んで山肌に激突しては堪らない。結局サン・ラモンにもう一泊するはめになった。

翌日も何時間か待った上，やっと雲の切れ間からイスコサシンの部落に着陸するこ

とができた。ここでは熱帯広葉樹林の天然更新試験地と試験的小規模製材所を見た。泊まった旅篭屋は柱に板を打ち付けただけの壁で，天井は無く直ぐに屋根であった。隣室との境も板一枚。角材と板で作った粗末なベッドがあるだけの2人用の相部屋。まあ日本では馬小屋といったところで，風呂やシャワーは無く，庭先に共用の洗面所と便所があった。暑くて喉が乾いても生水は危ないので近くの雑貨屋でセルベーサ（ビール）やコーラを飲んで凌いだ。夜は電気がないので帳場で蝋燭を買って来て点した。灯は暗いし蝋燭を節約するために早く寝るしかない。こんな所ではマッチやライターは貴重品である。しんと静まりかえったセルバの夜の暗闇の中での満天の星空は壮大の一語に尽きる。

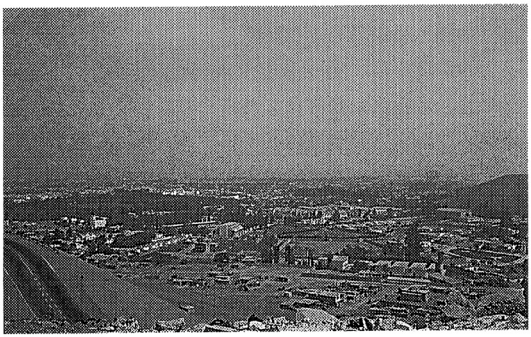


写真-3　リマの遠眺

写真-4　アンデス山中

イスコサシンからイキトスへはセスナ機で飛び，やっと街らしい所に辿り着いた。ここで一泊してアマゾン川上流のヘラロ・エレーナの部落までの往復は定期船を利用した。木造の2層甲板船で定員100名ほど。かつての瀬戸内海の巡航船というところで，焼玉エンジンで航行する年代物である。速力が遅いのと川の流れが速いため目的地までの約 150 km を 18 時間余をかけて遡る。流れを下るのはこれほどの時間はかからない。船中泊のため途中必要分の食糧を携行して夕刻に乗船し出航した。8月は乾季でさしもの大河の水位も下がっている。イキスト港で数 km の川幅のあるアマゾン川も雨季の水位より 20 m ほど低くなっており，乗船するためには土手の急傾斜を下らねばならなかった。翌年の3月，雨季に再度訪れた時は，川岸から溢れるほどに水位が上昇しており，アマゾン川の水量の多さに驚かされたものである。船は途中何度か集落のある沖で止まる。乗降客は岸からの小船で乗り移る。接岸用の桟橋があるのは限られた集落だけである。川を遡るうちに日が暮れると天幕だけの上甲板にハンモックを吊って，その中でエンジンの規則正しい振動に揺られて眠りに落ちる。

慣れないハンモックでの眠りは夜半に襲ってきた雷雨で覚まされた。横なぐりの風と雨，暗闇を照明弾のように照らす稲妻と雷雨。慌てて天幕の垂れを下ろして雨の降り込むのを防いだ。30分ほどで雷雨は過ぎ去り，もとのエンジン音だけの世界に戻り，昼の暑さに疲れた身体はまた直ぐに眠りに落ちた。朝がきて両岸に続くセルバの森林を眺めながら，昼過ぎにヘラロ・エレーナに着いた。

ここのプロジェクトでは熱帯林地域への入植のための試験研究が行われており，熱帯林の更新，果樹栽培，稲作，牧畜，淡水魚養殖等の混農牧林水産業を目指したものであった。ロッジに2泊したが，窓の防虫網が完ぺきでなく，就寝中に藪蚊（サンクロード）に脛から下をかなり刺された。痒みは数日後に治まったが，刺された跡は赤く残り，日本に帰った後まで2年間あまり消えなかった。

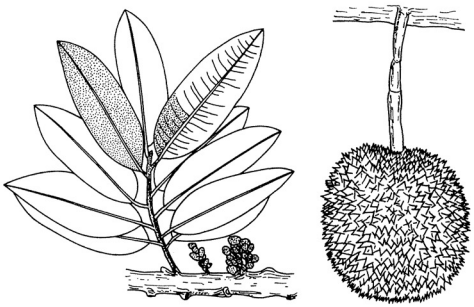
イキトスへの帰途の夜間の船上で，フィエスタ（パーティ）が始まった。携行したセルベーサ，コーラ，フーゴ（ジュース），ボカディージョ（つまみ）をとりながら談笑し，カセットレコーダーの音楽に合せて踊る。私も引張り出されて日系の女の子と踊った。フィエスタが始まってどのくらい時が経ったのか分らないが，皆が盛り上がっている最中に，突然，ドーンという音と共に全員甲板に投げ出された。しばらくは何が起きたのか分らなかった。座礁したかと思ったが，まわりの話では船にぶつかったと言う。被害は大したことなく，浸水や航行不能ではないようだ。事態が判明してみると，我々が衝突した相手はアマゾン川警備のペルー海軍警備艇だった。相手は鋼船，こちらは木造。幸い当方の速度が鈍かったため大事に至らなかった。しかし，警備艇の方も夜間無灯火で川の中に停泊していて，こちらの船灯りが近づくのに警告もしないとはお粗末である。おそらく監視を立てていなかったのであろう。これより1年ほど後に，リマ港内でペルー海軍潜水艦と日本マグロ漁船が衝突して，潜水艦の方が沈没するという事故が起きたが，秘国海軍の安全指揮能力はその程度のものかと考えさせられた。私は右肘のすりむきと肩の軽いうちみで済み，他の者も殆どかすり傷程度であったが，船室の上段ベッドに居たアメリカ人は床にころげ落ちてかなり打撲したらしく相当痛がっていた。

ブラジルに出張する時に黄熱病の予防接種が要るため，国立病院へ出向いた。看護婦にその由を告げると，通りの角の薬局で用紙を買ってこいと言う。何の事かわからないので聞き直し，医・薬・書分業ということを理解した。イエローカード用紙を買って戻ると，ワクチンはいくら，注射器はいくら，新品の注射針はいくら，この値段を払えるなら接種してやると婦長が言う。必要ゆえ支払いを承諾した。カードに医師の証明印を押す時に，何日に入国するのかと聞くので1週間後と言うと，効力発生期間に日数不足だがいまさら仕方無いので，接種日を遡って証明しておくといって署名してくれた。費用は日本円にして200円足らず，1回接種だけだった。

リマに住んで1年が過ぎた頃，大統領選挙を前にして国内の治安が悪化した。反政府ゲリラ活動が活発化すると共に，軍部クーデターの気配もあった。このため在秘国際連合関係機関が緊急時の対応策について会合した。私もFAOの委員の一人に挙げられ出席した。会合の結果，緊急時には各職員の居住地区毎に指定場所に集結し，

国連旗の保障の下に指定順路を空港まで移動し，国連救出機の到着を待つというマヌアルとなった。非常時の各人への連絡系統の確認，待機中の最低一週間分の生活物資備蓄の提言もされた。反政府ゲリラは，外国人でも政府に協力する者は容赦しないと明言し，実際に地方で犠牲になった外国人もいた。我々のプロジェクトも間接的に被害を受けた。向かいの建物に厚生省の分室が入居していたが，小型時限爆弾が仕掛けられ爆発でコンクリート壁が 30 cm ほどえぐられ，こちらの建物の窓ガラスは爆風で粉々に砕け落ちて路上に散乱した。爆発は土曜日の朝 6 時で休日の早朝ゆえ幸いにも人身被害は無かった。月曜日に出勤して路上と事務所の床に残るガラスの破片を見て，物騒な場所で勤務していることを実感した。運良く私の滞在中には国連旗の保障にすがる事態は起きなかった。

国の経済は下降の一途を辿っているときでありインフレの加速度的進行にはあきれるだけであった。着任時に闇レートで US 1 $＝35 インティスだったのが，離任時には 2,500 インティスほどに下がり，聞くところでは現在 30 万インティス以上で年 3,000% を越えるインフレが続いているとのことである。生活物資，公共料金の値上がり，値上がりを当て込んでの売惜しみ，物隠しによる品不足。原料やエネルギーの供給不安定による製品の生産，流通の不安定，品質の不確実性。瓶の飲料は空き瓶を持参しないと売ってくれない。缶入りは製造していない。プラスチック入りはある。街には大勢の屑屋が三輪リヤカーで徘徊し，空き瓶，古新聞，古雑誌，バッテリー等を買取っていく。車を修理しても工場は必ずはずした部品を持ち帰らせてくれる。中古部品で売れるからである。物不足ゆえ再利用の流通機構は整備されているようである。今でも屑屋の呼び声のボテージャ(瓶)は，リマの街に響いていることであろう。



ドリアンの葉・花・果実